コウきゅーぶ!　Team of another　1st Capter　鳥ノ宮小女バス編

虹人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロウきゅーぶ！　Ｔｅａｍ　ｏｆ　ａｎｏｔｈｅｒ　１ｓｔ　Ｃａｐｔｅｒ　鳥ノ宮小女バス編

【Ｎコード】
Ｎ０３０４Ｚ

【作者名】
虹人

【あらすじ】
とある事情で鳥ノ宮小学校の女子バスケ部と合同練習をすることになった慧心学園の女子バスケ部と昴。
鳥ノ宮のバスケ部員やそのコーチとともに新たな日常が始まる！
ギャグにシリアス、ラブコメにスポコン、バトルあり（！？）のローリング・スポーツコメディ、ここに開幕！
注：オリ主はややチートです。また作者に文才はありません

はじめに（注意書き）

注意書き（必読）
この作品はロウきゅーぶ！の二次創作です。
お読みになる前にいくつかの注意点があるので、以下の内容に不快感を示す方は読むことをオススメしません。
1：作者はここに投稿することすら始めての初心者＆ド素人です。
文章の内容や設定ミスが多々あるかと思います

2：この作品にはもうひとつのバスケチームを登場させるため、オリキャラが多数登場します。
オリ主が昴と同じくバスケのコーチをし、教え子のチームメイトも全員オリキャラになります。

3：この作品のオリ主はかなりチートです
（ただしオリ主は片腕の故障によりチートっぷりをフルに発揮することはあまり無いかと思います）
それ、チートの意味あるのか？と言われればそれまでなんですが、ストーリー上の演出みたいなものと考えていただければ・・・

4：この作品は原作7巻まではほぼ原作通りという設定です。
よって時系列的には8巻の途中からのスタートということになります。
またストーリーはほとんどオリジナル展開になってしまってます。
その影響で一部の原作の話の時系列にズレが生じてます。
構想が9巻までの時点で出来ているため、１０巻以降の話とは食い違う点が出てくるかもしれません。
ご了承ください。
すでに大まかな話はできているので訂正は難しいです。

5原作8巻に登場したミミーですが、登場の予定は残念ながらありません
（出してしまうと5年女バスとの絡みが増え、ストーリーが長くなってしまうので）
どうしても出して欲しい、という意見が多い場合、別の機会で登場させるかもしれません。

6：この作品はギャグ、ラブコメ、シリアス、バスケなど様々な要素を詰め込んでます。
その影響で一部のキャラが崩壊してたり
不遇な扱いになったりするかもしれません。
お気に入りのキャラがそうだった場合、直ちに見るのを中止することを推奨します。
また、バスケの知識はスラムダンクとwikipediaでかじった程度なので
バスケパートに関してはおかしい点が出てくるかもしれませんし、話の都合上キングクリムゾンすることもあるかもしれません。あらかじめご了承ください。

7：この作品にはパロネタが多数出てきます。
原作でもこういうパロネタはあったので大丈夫かもしれませんが、念のため。

8：この作品には15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現が含まれていますが、
もしかしたらもっと過激な表現があるかもしれません（そんなことは無い様に気をつけてはいますが）。
また1部の話ですが残酷な描写と思われるもの（グロテスクなものではないですが）があります。

少しでもだめな方、苦手な方は読まないことをオススメします。

９：ミニバスの公式戦は１０人以上いないと参加できませんが、この作品では６人以上で参加できる設定になってます。１０人もキャラ用意できないって！！そんなにキャラ出したら収拾つかなくなるから！！

１０：最後に。この作品は昴×智花のカップリングを応援しています。

「昴×葵だろ！」な人には絶対にオススメできません。

長くなりましたが、ようは作者の妄想のままに書きまくってるといったところです。

ひどい出来だと思いますがそれでも面白いと思っていただけたら幸いです。

プロローグ

「合同練習？」
それは長谷川昴の父親、銀河が帰ってきた後のことだった。
篁美星は昴と銀河に挨拶がしたいとやってきた湊智花に鳥ノ宮小との合同練習のことを話した。
「そ。その鳥ノ宮小学校なんだけどね、体育館の老朽化が激しくて今立て直してるとこらしくて。
しばらく体育館が使えないからバスケの練習とかもできないでしょ？
そこで慧心の女バスと合同でいいから練習に参加させてもらえないかって話になった訳。」
「でもそんなに大勢でこられたら練習するスペースがないんじゃないか？」
「あー、その辺はなるべくこちら側に迷惑かけない範囲で練習するって言ってたし、
それに向こうの人数は7人ぐらいだからそれほど窮屈にはならないと思うよ。」
硯谷女学園の女バス並みの人数なら大変なことになるのではと心配したがそれほど大人数のチームではないらしい。慧心（こちら）よりは少し多いが。
「ところで鳥ノ宮小の女バスってどんなチームなんですか？」
智花が美星に尋ねる。昴も鳥ノ宮小のことはあまり知らなかったためどんなチームなのか興味があった。
「うーん、一言で言うなら万年弱小校、だね。創立時からずっと毎年初戦敗退の歴史があるってさ」
はっきり言うなよ・・・と昴は心の中でツッコミを入れる。
「ただ――」
「ただ？」

「今年の6年の女バスは別格だって噂だよ。何でも結構凄いバスケが上手いコーチが教えてるとかで。
確か歳は・・・昴、あんたと同じくらいだったかな？」
「俺と同い年くらいって・・・高校生なのか？」
「まぁそういうことになるねー。どこの学校だったか忘れたけど。にゃははー。
まあ明後日の合同練習のときに会えるわけだしそん時にわかるでしょ。」
なるほど。そのコーチが鳥ノ宮の女バスにバスケを教えてるということは当然合同練習にも来る、ということか。
「ま、そういうわけだからさ、2週間ほどで向こうの体育館の改築が終わると思うから
それまでは2人とも向こうとも仲良くやってね～。」
そう言うと美星は部屋を出て行った――――

俺は今、智花と一緒に買い物に出かけている。
母さんが夕飯の食材が足りなかったため俺にお使いを頼んだら、智花も一緒に行くと言い出したのだ。
「悪かったね、智花。母さんのお使いにつき合わせたりなんかしちゃって。」
「いえっ！そんなこと無いですっ！一緒に行くって言ったのは私のほうですし・・・」
そんなことを話しているときだった。
後ろからバイクが俺の右側をすれ違ったと思ったら、買い物袋を奪われていた。
「ひ、引ったくりだ！」
慌てて後を追おうとしたが相手はバイクだ。とてもじゃないが追いつけるものじゃない。

そんな時、引ったくりが向かっている先に一人・・・俺と同じ高校生ぐらいの男が歩いていた。
引ったくりは男の左脇を素通りしようとした、次の瞬間、ひったくりの左手には盗んだ荷物は無く、男の左手にその荷物が存在していた。
引ったくりは突然の出来事にパニックになり、あわててその場から逃げ去っていった。

「ほら、あんたのだよな？」
男は盗まれた荷物を俺に差し出した。どうやら事情を察して取り返してくれたらしい。
だが俺は別のことが気になっていったため、それに気がつかなかった。
「・・・？昴さん？どうかしましたか？」
「あ・・・いや、なんでもない。」
智花に声をかけられ、慌てて男から荷物を受け取る。
「ありがとう。本当に助かったよ。」
「気にすんなって。それよりあの引ったくりだけど一応警察に通報したほうがいいかもな。相手のバイクのナンバーは誰か覚えてるか？」
「あっ、それなら私が覚えてますっ！」
智花が手を上げ返事をする。
「そっか、それなら悪いけど後は任せてもいいか？
急いで家に帰らねーといけないんでな。」
「あ、ああ。別にいいけど・・・」
俺が言い終わる前に男はその場から立ち去っていた。
「あ・・・行っちゃいましたね・・・」
「ああ・・・仕方ない、俺たちも行こうか？」
「はいっ！」

そうして智花と歩き出す中、俺はひとつあの男のあることが気になっていた・・・

あの時の引ったくりから荷物を取り返すときの動き・・・
バスケのスティールに似ていた気がしたけど・・・バスケ選手？まさか、な・・・

（それにしてもあの二人・・・兄妹かと思ったが違うみたいだな・・・昴さんって呼んでたし、たぶん恋人ってとこか・・・？）
兄のことを名前で呼ぶ妹もいるだろうがそれならばさん付けをするなんて事はまず無いだろう。
身長差があるのは気になったが、彼女はちょっと背の伸びが遅い高校生または中学生なんだろう、と納得した。
（っと・・・大分時間食っちまったな・・・そろそろか帰らねーとアイツが心配するか・・・
　明後日から慧心との合同練習も始まるわけだしな）
そう呟きながら鳥ノ宮小女バスのコーチ、神崎風馬（かんざきふうま）は帰路に着いた・・・

第一話　鳥ノ宮小学校女子バスケットボール部（前書き）

お待たせしました。ようやく第一話です

第一話　鳥ノ宮小学校女子バスケットボール部

―交換日記（ＳＮＳ）―　◆Ｌｏｇ　Ｄａｔｅ◆　９月４日

『いよいよ明日だな、ごーどーれんしゅー！』まほまほ

『おー、ひなも鳥ノ宮のみんなとバスケするの、たのしみ。』ひなた

『そういえば鳥ノ宮小のコーチも一緒に来るんだよね…怖い人じゃないといいけど…』あいり

『大丈夫だよ愛莉。美星先生の話だと皆から懐かれてるって話しだし、

悪い人じゃないと思うよ！』湊　智花

『そっかー。とりのみやのコーチもくるんならまたアレのじゅんびしねーとなっ！』まほまほ

『ちょ、ちょっと真帆！まさか向こうのコーチの人にまでアレをやるつもりなの！？』紗季

『あたりまえだ！ダイイチインショーってのはだいじなんだぞ！』まほまほ

『そ、それはそうだけど…』紗季

『おー。ひなはやりたい。』ひなた

『な、なんかまた大変なことになりそう…。』あいり

『そ、そうだね…。』湊　智花

9月5日

――慧心学園校門前――

さて、どうしたものか・・・

風馬は悩んでいた。

何せここは慧心学園。今まで来ていた鳥ノ宮小とはいろんな意味で勝手が違うのだ。

そうこうしていると後ろから急に誰かに声をかけられた。

「あれ、あんたはこの間の・・・」

振り向くと、そこには一昨日引ったくりの被害にあった男、長谷川昴がいた。

「なるほど、あんたが慧心学園のバスケ部のコーチをしてるわけか…
ああ、そういやまだ名前言ってなかったな。俺は神崎だ。よろしくな！」

「俺は長谷川昴って言います。まさか神崎さんが鳥ノ宮のコーチだったとは思いませんでした。」

「俺のことは神崎でいいぞ。あと年もあまり変わらないみたいだしタメ口でいい。」

「わかった、神崎。」

それから二人は体育館に向かう間、軽く世間話をしているうちにすっかり意気投合していた。

「そういえば神崎、鳥ノ宮の女バスの子達は？」

「うーん…まだ来てないみてーだな…先に入って待ってるか」

「いいのか？待ってなくて。」

「警備員の人に一通り説明してあるし、大丈夫だろ。
ところで長谷川、慧心女バス《そっち》の子達で何か気をつけたほうがいい事とかあるか？
おかしな事言って心象悪くするのも拙いしさ。」

体育館前まで来た風馬が扉へ向かいながら昴に尋ねる。

「気をつけたほうがいいこと……あっ！そうだ！」
体育館の扉に手をかけようとしたとき、突然昴が声をかけてきた。
「部員の中に一人背の高い女の子がいるんだけど、
その子高身長コンプレックスで背のこと凄く気にしてて、
だからあまり背のことには触れないであげて欲しいんだ。」
万里や葵のおかげで大分コンプレックスも克服できてはいるが、愛莉は繊細な子だ。
初対面の子にからかわれて元の木阿弥に、なんてことになっては洒落にならない。
念のために気をつけるように言っておく。
「わかった。あいつ等にもメールしておくよ。後で皆が知らずに変な事言ったりしたら大変だしな。」
そういうと風馬は携帯でメールを送った。
そして改めて体育館の扉に手をかけ――――
「おかえｒバタン！
風馬が扉を開け、１秒ほどで体育館の扉が閉じられた。
その様子を見て昴は風馬が何を見たのか大体察した。
神崎は多分皆のメイド服姿か何かで出迎えられたんだろう。
最初は戸惑うよなぁー。俺もそうだったし・・・。
「長谷川…」

「どうした？神崎」

「今日は９月４日だった。」

「……。は？」

突然風馬はわけのわからないことを口走った。

「今日は９月４日だったんだ。だから体育館がメイド喫茶になってたんだそうに違いない全く俺としたことがとんだミスを――」

「落ち着け！今日は９月５日だから！」

「いーや、今日は９月４日なんだ！９月４日に違いないんだ！９月４日９月４日９月４日あはははははははははは……」

すっかり壊れてしまい現実逃避してしまった風馬。

その後昴が風馬を落ち着かせるのに３０分もかかってしまった。

「落ち着いたか？」

「ああ…すまない。急に取り乱したりして」

「いや、誰だってあんなの見せられたら最初は動揺するさ。―（神崎の場合異常だったけど）
とりあえずあの子たちにはきちんと言っておいたから、もう大丈夫だと思うぞ。」

風馬がある程度落ち着いた後、昴は体育館に入り真帆たちに着替えるように言っておいた。
これでさっきの様な騒動になることは無いだろう。

「じゃあ改めて入りますか。」

風馬が再び扉を開け、二人は中に入った。

「え、えーっと…こ、こんにちは…」

さっきの事があったため風馬の挨拶が大分弱々しい。
それが余計に気まずさを増していた。
みんなのほうもさっきの事があったせいか少しばつが悪そうな顔をしていた。
そんな空気を何とかするため昴が口を開いた。

「き、今日から合同練習があるわけだけどこちらの人が鳥ノ宮小でコーチをしてる神崎って人だ。」

少し調子が戻ってきた風馬が自己紹介を始めた。

「みんな、さっきは取り乱してすまなかった。俺は神崎。鳥ノ宮の女バスのコーチをしてる。」

「あ、私は永塚紗季です。こちらこそ先ほどはすみませんでした、バカ真帆のせいで…。」

「なっ！あたし一人のせいみたいにゆーなっ！っと、あたしは三沢真帆！よろしくなっ！ザッキー！」

「ざ、ざっきー…？」

妙な呼ばれ方をされて少し戸惑う風馬。

「うん。かんざきだからザッキー。」

「ま、まあいいけど…」

そう言うと風馬は他のメンバーへ視線を移した。

「おー。ひなは袴田ひなたっていいます。」

「あ、えっと、私は香椎愛莉です。よろしくお願いしますっ。」

それぞれが自己紹介する中、風馬は見覚えのある少女に気付く。

「あれ、あんたは確か一昨日長谷川と一緒にいた…恋人？」

「こ、こい！？ふ、ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

昴の恋人と思われていたことに恥ずかしさで顔を真っ赤にする智花。

「おおっ！ザッキーよくわかったな！」

「さすが神崎さんですね。２人の仲を1発で見抜くなんて…」
そんな状態の智花に追いうちをかけるかのようにからかう真帆と紗季。
「ちっ、違いますっ！私と昴さんはまだそんな関係じゃ…」
「「「まだ？」」」
風馬と真帆と紗季の声がハモった。
「はっ！はうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ～……／／／」
智花の顔はすっかりゆでだこのように真っ赤になっていた。
「ねー、かんざきのおにーちゃん。ひなはー？ひなとおにーちゃんは恋人に見えるー？」
ひなたも話に混ざってきて収拾がつかなくなりそうな気がした風馬は皆を落ち着かせることにした。
「待て！話がややこしくなってきたからとりあえず落ち着こう。それと袴田、俺のことはお兄ちゃんって呼ばなくていいぞ。」
「おー？じゃあかんざき。」
「ちょっ！いくらなんでもその呼び方は失礼でしょ！」
紗季がひなたの呼び方を止めようとした、が

「ぷっ、くっ…あはははははっ！なんかいいな、それ！
気に入った！その呼び方でかまわない。」
風馬はその呼び方を気に入ったようだ。
そうこうしている内に智花のほうも大分落ち着いてきた。
「そういえばいろいろゴタゴタがあったからまだ彼女の名前聞いてなかったな。」
「あ、そういえばそうでしたね。私は湊智花です。よろしくお願いします。」
「そして長谷川さんの恋人でｓ「もぉーっ！紗季っ！」
またからかおうとした紗季に対して顔を真っ赤にしながら怒る智花であった。

「ところで神崎さん、さっき智花ちゃんと長谷川さんが恋人だって思ってたみたいですけど
兄妹に見えた、とかは思わなかったんですか？」
愛莉が風馬に尋ねてみた。
「まあ…兄妹とは思えなかったし。最初は中学生くらいかな、とは思ってたけどな。」
小学生だったのにはちょっと驚いたが風馬にとってはそれほど気になることではなかった。

「兄妹だったら名前で呼び合うってのはまず無いだろうし、呼んでもせいぜい――」
バタン！！
風馬が言葉を続けようとしたとき、体育館の扉が思いっきり開かれ――
「風ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ兄いいいいいいいいいいいーーーーーーッ！！」
風馬と同じ髪の色をした少女が恋する乙女のごとく風馬の方へ全速力で突撃してきた。
その少女の突撃を闘牛士のごとく回避し、少女は体育館の壁に思いっきり激突した。
「ちょ、ちょっと！大丈夫！？」
「大丈夫だ、問題ない。」
その様子に心配した紗季に風馬が平然と答える。
「か、神崎さん、いくらなんでもそれはあんまりじゃ…」
「大丈夫だ。俺の妹はそんなにヤワじゃない。」
「ヤワじゃないって…え？妹？」
愛莉が驚いていると少女は頭をさすりながら起き上がってきた。
「痛たたた…ひどいよ風兄ぃ…。あたしの愛情表現をよけるなんて……」

「まったく、お前はどこでも相変わらずだな…。紹介する。こいつが鳥ノ宮小女バスのメンバーの一人で俺の妹の神崎雷華(らいか)だ。」

「「「「「「いっ、妹ぉ！？」」」」」」

昴と慧心女バスメンバーは驚きの声を上げた。

「そんなに驚くことか？」

「いや…あんまり似てなかったから…」

昴の言うとおり、二人の外見はあまり似ていない。同じなのは髪の色がライトグリーンなところぐらいだろう。

「それより雷華、他のみんなも来てるんだろ？みんなも呼んでやってくれないか？自己紹介もしないといけないしな。」

「あっ、うん！みんなーーー！入ってきていいよーーーーッ！」

雷華が大声で呼ぶと他の女の子たちが次々と入ってきた。

一人目は黒髪で三つ編みの少女で背はひなたより少し高い程度の女の子だった。

「えとえと、植月麻衣菜(うえつきまいな)って言います。ポジションはＰＧ（ポイントガード）です。よろしくお願いします。」

二人目は茶髪でロングヘアーの少女。

「ウチは西山(にしやま)このは。
ポジションはＳＦ（スモールフォワード）や。みんな仲良うしてなー。」

三人目は麻衣菜と同じく黒髪で少しクール…というか寡黙な雰囲気のする少女だった。
「…倉石光(くらいしひかり)。
ポジションは同じくＳＦ（スモールフォワード）。…よろしく。」

そして四人目と五人目。紫色の髪で、片方はショートヘアーのツインテール、
もう片方はセミロングの少女だ。
「双代亜矢(ふたしろあや)です。
ポジションはＳＧ（シューティングガード）です。よろしくお願いしますです。」

「亜矢の双子の妹の双代沙矢(ふたしろさや)なの。
ポジションは亜矢と同じくＳＧ（シューティングガード）なの。
よろしくお願いしますのー。」

最後に雷華が自己紹介することになった。
「じゃあ改めて自己紹介するねッ。神崎雷華、
ポジションはＰＦ（パワーフォワード）！そんで風兄の妹ですッ！
あたしのことは雷華って呼び捨てでよんでいいから。みんな、よろしくッ！」

その後、智花達も鳥ノ宮の女バスメンバーに自己紹介を済ませたのだが――――

「あれ？おい雷華、空条はどうした？一緒に来てないのか？」

風馬が一人足りないことに気付き、雷華に尋ねる。

「うん。ちょっとバスに乗り遅れちゃったみたいで。でももうすぐ来ると思うよー。」

「くう…じょう……？」

智花が風馬の出した名前に反応する。しかしそれに気付く者はいなかった。

それから数分後――

「すみません！遅くなりました！」

体育館の扉を開け、最後の一人と思われる少女が入ってきた。炎のように真っ赤な髪で、身長は愛莉ほどではないがかなり高いほうだ。

「空条飛鳥（くうじょうあすか）です！ポジションはセン……タ……」

少女――飛鳥の言葉が途中で止まった。その視線は智花のほうに向けられていた。

「え……？とも…か……？」

「あ…あす……か…？」

戸惑いを隠せない飛鳥。智花はどこか怯えているようにも見えた。その様子に気づいたのか、飛鳥は

「あのッ！神崎さん！せっかく来たのに悪いんですけどちょっと具合が悪いんで今日は早退しますね！」

「あッ！おいッ！！飛鳥！！」

返事を聞く前に逃げるように体育館を出て行く飛鳥。そして――――

「あ…す……か…」

智花は意識を失った……

「智花！？智花！！しっかりしろ！智花ぁぁぁぁぁっ！！」

第一話　鳥ノ宮小学校女子バスケットボール部（後書き）

虹人「どうも初めまして、虹人です。」

雷華「初めましてー。雷華でーす（楽屋裏ｖｅｒ）。」

虹人「しかし連載一話目からシリアス展開突入になるとは…」

雷華「自分で書いといて何言ってんの！？」

虹人「いやホントマジでどうしてこうなったのかわかんない。
本来はギャグを展開しつつ
智花と昴のニヤニヤ展開したりするはずだったのに…」

雷華「それならあたしと風兄のラブラブ展開も書いてよ！！」

虹人「これ読んでる人が近親相姦を望むなら考えておきます。」

雷華「人任せ！？」

虹人「それではまた次回！
感想とかあればご自由にどうぞ～。」

第二話　智花と飛鳥（前書き）

遅くなってすみませんでした。第二話です。

第二話　智花と飛鳥

「空条飛鳥…間違いないね、前の学校で智花と同級生だ。
彼女は元はバレー部だったけど素行不良が原因で辞めてるみたいだね。
迂闊だったよ…まさかこんな形で智花と鉢合わせることになるなんて……」

あの後智花は保健室に運ばれた。
母親に連絡してあるので、しばらくすれば迎えに来るだろう。
その間に昴たちは美星先生に飛鳥のことについて調べてもらっていた。

「もっかんの前の学校の同級生……ってことはあいつ、前の学校でもっかんのこと苛めてた奴らの仲間だったのか！」

真帆が怒りをあらわにする。真帆は智花の過去のことを知っている。だからこそ智花の前の学校に対してあまり良い印象を抱いていない。
だが、

「飛鳥はそんなことしないよッ！！」

突然大声を出して反論したのは雷華だった。

「飛鳥は、そんなことしないよ…。一緒にいたからわかるもん…
飛鳥はそんなことするような子じゃないって…」

「わたしも…彼女を信じます。最初は怖くてとっつきにくいところ

もあったけど
　あの子は理由も無く人を傷つけたりするような子じゃありません。信じて…くれませんか？」
雷華に続くように麻衣菜も彼女を弁護する。
それに同調するようにこのは・亜矢・沙矢・光も頷く。
「そうだな……俺も空条がそんな人間だとは思っていない。
　だがもし空条がお前の思っているような人間だったのなら――それは全て彼女をバスケ部に引き入れた俺の責任だ。
　だからその時は――俺を煮るなり焼くなり好きにすればいい。」
「ちょっと！風兄ッ！！」
風馬の発言に慌てて止めようとする雷華だったが
「雷華、このくらいの覚悟はしないと彼女達は納得しないさ。大丈夫だ。空条を信じてるんだろ？」
「……うん」
「これが俺達の答えだ。これで勘弁してくれるか？」
「うー……みんながそこまで言うなら……」
まだ少し釈然としない様子の真帆だったが、何とか納得してくれたようだった。
その後、バスが来る時間がきてしまい、今日は練習することができなかった。

「長谷川、ちょっといいか？空条のことなんだが…」
智花の母親・花織さんが迎えに来た後、風馬が昴に話しかけてきた。
「空条……飛鳥ちゃんのことで？」
「ああ。あの後少し考えたんだが、俺は湊のことは何も知らない。だがおまえは彼女の過去のことについてわかっている…そうだな？」
「ああ…でもそれがどうかしたのか？」
「湊と空条の間に何かあったのならそれはきっと前の学校で何かあったんだろう。
だが俺は空条からは何も聞いていないし聞こうとは思わなかった。だからアンタに頼みたい。湊のことをキチンとわかっているアンタなら空条もきっと話してくれるはずだ。」
「わかった……でもどうやって彼女に会うんだ？」
いきなり彼女の家に押しかけるのもおかしい気がするし、かといってあんなことがあった以上部活動のときに話が出来るとは思えない。
それどころか部活動に来てくれるかどうかも疑わしい状況だ。
「そのことなら俺に任せろ。これでも俺は鳥ノ宮小の女バスのコー

チ、なんだからな」

翌日。
昴は朝早くにロードワークに出ていた。
だがいつものコースではない。鳥ノ宮町にある河原沿いの道だ。
しばらく走っていると向こう側から見覚えのある赤髪の女の子が走ってくるのが見えた。
実は昴は風馬から飛鳥が毎日ロードワークでここを通ることを聞いていたのだ。

「あれ、あなたは確か昨日慧心学園の体育館にいた人……ですよね？」

まともに顔をあわせていたわけでもないのに自分のことを覚えていたことに少し嬉しさを感じつつ、昴のほうも自己紹介をする。

「あ、覚えててくれたのか…俺は長谷川昴。慧心学園の女バスのコーチをしてるんだ。
それで君は空条飛鳥ちゃん、でよかったんだよね？」

「あ、はい。飛鳥と呼んでくださって構いません。そう、ですか……智花達の…」

飛鳥の表情が暗くなる。

「ここで話をするのもなんだし、少し場所を変えようか？」

昴と飛鳥は、公園に来ていた。ロードワークのコースの途中にある場所だ。

「はい、飛鳥。カフェオレでよかったっけ？」

そう言うと昴は自動販売機で買ってきたカフェオレの缶を飛鳥に手渡した。

「あっ、ありがとうございます、長谷川さん。それで、長谷川さんは、私のこと……ご存知なんですよね……？

私と智花が、前の学校で同級生だったこと……」

昴は無言で頷いた。

「それで……長谷川さんは私のことを…」「心配したさ」

「……え？」

飛鳥は昴の予想外の一言に戸惑った。前の学校で同級生だと知っているならおそらくあのことも知っている。

そのことで自分を糾弾しに来たのだとばかり思っていたからだ。

「雷華たちから聞いたよ。君は理由もなく誰かを傷つけたりする子じゃないって。

俺も……こうして話してるとそう思えるよ。」

嘘偽りのない昴の言葉。だが飛鳥にとってそれは辛いものだった。

「私は……雷華たちが思っているほど立派な人間じゃありません……
あの時だって……私のせいで、智花は……」

「何か……あったのか？」

飛鳥はしばらく考え込むと、昴の問いに答えず、逆に質問してきた。

「長谷川さんは智花のこと、どれくらいご存知ですか？」

「どれくらいって・・・智花の前の学校でのこと？」

そのことなら知っている。
前の学校でバスケをやっていて、一生懸命になりすぎて周囲の反発を受け孤立していったこと。

「そう、ですか・・・
わかりました。長谷川さんにはお話してもいいかもしれません。
智花が転校することになった本当の理由と・・・
私が智花にしてしまったひどいことを・・・」

第三話　咎を背負う少女（前書き）

少し遅くなりました。第三話です。
今回は少し残酷描写があります。苦手な方はご注意を。

第三話　咎を背負う少女

「智花が転校することになった・・・本当の理由？」

「はい。智花とは前の学校では別のクラスだった上に当時の私はバレー部だったので最初はあまり話す機会がなかったんですけど
バスケが原因で孤立するようになってからはだんだんほっとけなくて、それ以来仲良くするようになったんです。」

「でもそれがどうして・・・」

どうしてこんなことになったのか、昴が言い終わる前に飛鳥が言葉を続けた。

「それでも智花はバスケの仲間とうまくいかなくて・・・それで私、バレー部に入らないかって提案したんです。
あの学校のバレー部は毎年いい成績を残してて練習も厳しかったから、バレー部のメンバーも智花に合わせられると思って。
仮に智花がバスケを諦められなかったとしても、ほとぼりが冷めればまたバスケ部の皆とも仲良く出来る・・・
そう考えていたんです・・・あの時は・・・ッ！！」

飛鳥の拳に力が込められていく。

「いじめ…か？」

昴の問いに飛鳥は無言でコクンと頷く。

「智花がバレー部に入ってからしばらくして、２組に分かれて練習

試合を行ったんです。
その時でした・・・私が智花をバレー部に誘ったのを後悔したのは・・・
試合の中で智花にボールがぶつけられたんです・・・ッ！
もちろんそれくらいなら偶然当たっただけの事故って可能性もありえますけど・・・あの時は・・・」

「まさか・・・わざと？」

「智花にボールをぶつけた相手は・・・笑って、ううん、嗤(わら)って、いたんです・・・ッ！
自分のしたことに何の罪悪感も感じずにッ！周りの皆もッ！それが当たり前のようにッ！」

「私はその子に殴りかかっていました・・・」
―――イマスグトモカニアヤマレ―――

「それでもその子は謝りませんでした…それどころかこんなことを言ったんです。」
『こんな奴がいくら怪我したって構わないわよ！』
―――トモカガナニヲシタ―――

「その言葉に私の中で何かが切れました…」
―――コノウデガトモカヲキズツケルノナラ―――

「そして私は―――」

――――コンナウデハナクナッテシマエバイイ――――

「その子の腕を、折ったんです」

昴は言葉を失った。
まさか小学生の、それも女子の喧嘩がここまでエスカレートすると
は誰も想像出来なかっただろう。

「そんな私の姿を見たあの時の智花の顔……今でも覚えてます。
怯えていました……恐ろしいものを見ているような目で……
先生たちが止めてなかったら私はもっと残酷なことをしていたか
もしれません。」

「その後、私と智花は一度も顔をあわせることはありませんでした。
そのまま智花は転校することになって、その少し後に私も転校が
決まったんです。
でも智花はきっとこう思っていたはずです。
『飛鳥がこんな恐ろしい子だと思わなかった』って……」

「……」

「そして昨日……智花と再会して確信しました…智花を傷つけたの
は他でもない、私自身だったんです！
私は…私は智花の親友でいてあげられなかったッ！
自分の知らなかった悪魔のような本性をさらけ出して智花の心を
傷つけたんですッ！！
私は……私は……」

飛鳥は今にも泣き出しそうな苦しそうな表情をしていた。

「飛鳥」

そんな飛鳥を落ち着かせようと、昴は飛鳥の肩の上に手を添えた。

「俺は雷華たちの言うとおり飛鳥を信じてよかったと思ってる。
その子の腕を折ってしまった事だって何の理由も無かったわけじゃない。
智花のために怒れる、そんな優しい心が少し間違った方向に向かってしまっただけなんだ。」

それに、と昴は言葉を続ける。

「智花は、飛鳥のことを恨んだりしてないと思う。いや、恨むような子じゃない。
まだ半年も経ってない間柄だけど、智花のコーチとして自信を持って言えるよ。」

「智花は……許してくれるでしょうか……」

「当たり前だろ？智花ならきっと許してくれる。俺を信じてくれないか？」

「……私、チームメイトに裏切られたあの事件以来……他人を信じられなくなっていました……
でも、雷華たちのおかげで、もう一度他人を信じようって思えるようになったんです……」

仲間だと思っていた友達は平気で人(智花)を傷つける人間だった。最(智)後の友(花)達も私の元から離れていってしまった。
もう誰も信じたくない。私は誰とも仲良くなんかしたくない。
飛鳥はずっとそう思っていた。
だけど今は違う。
どれだけ拒絶しても、信じてくれる仲間ができた。その仲間が、信じることの大切さを思い出させてくれた。

「長谷川……さんッ……ヒック……わたし……ヒック……もう一度……信じ…たい……ですッ……！！
長谷川さんを……ヒック……そして……智花のことを……ッ！！」

飛鳥の瞳に涙が溢れていた。
その時――
「昴さん……それに、飛鳥……？」
不意に後ろから声がした。振り向くと――
「とも……か……？」
智花がいた。
智花は今日の朝練をしに昴の家に向かったら美星から昴がこのロードワークの事を聞いてここまできたのだ。
ちょうどいいところに来た、と思った昴は智花のところへ行き、智花と少し言葉を交わした。
そして智花と飛鳥を残してその場から離れていった。

「と、智花……その……」
「あ、飛鳥……えーっと……」

気まずい。
二人ともしばらくしどろもどろな状態が続いて、ようやく意を決した飛鳥が話を切り出した。
「……智花、ごめんなさい！」
「……え？」
「私、ずっと謝りたかった……。感情に任せて暴れて、智花を怖がらせたこと……
智花を傷つけたこと、ずっと後悔してた……」
「飛鳥……」
飛鳥は智花のことで苦しんでいた。
そのことに智花は少し押し黙ってしまうが、しばらくして今度は智花が口を開いた。
「私も……飛鳥に謝りたいと思ってた……私のために怒ってくれてたのに、
飛鳥を傷つけるような態度をとっちゃったこと、ずっと後悔してたの……」
「智花は何も悪くないよ！だから……自分を責めないで……ね？」
「……わかった、飛鳥。だから……飛鳥も自分を責めるのはもうやめよう？
私、また飛鳥と親友でいたい……他のみんなと一緒に仲良くしたいの……」
智花の瞳にも涙が浮かんでいた。
「智花……うっ……うぅっ……」
智花もまた、飛鳥のことで苦しんでいた。
お互いにその気持ちを伝え、誤解を解いた二人は抑えていた感情が

爆発し――――
「「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーっ！！！！」」
二人は思い切り泣いた――――

「それじゃあ私、昴さんのところへ行かないといけないから……」
そう言って智花は公園を出ようとした。
「智花は……長谷川さんのことが好きなんだね。」
「え、えぇぇぇっ！？そんなっ、私はっ！」
飛鳥の言葉に智花は顔を真っ赤にして否定しようとするが

「隠さなくてもいいって。智花が長谷川さんのことを好きになったことは間違いなんかじゃないから……
もし、最初に出会っていたのが神崎さんじゃなくて長谷川さんだったら……
私も長谷川さんのこと好きになってたかもね。」

「あ、飛鳥っ！？」

「大丈夫！私は最後まで智花の味方だから……今度は間違えたりしない。
智花のこと、応援してあげたいの。私は智花の『親友』だから。」

飛鳥は穏やかな表情で、しかし真剣に智花の恋を応援する事を告げる。
そんな飛鳥に智花は恥ずかしそうにしながらも何も言わず、
ただ『ありがとう』と言っているような微笑みで応えた。
そして飛鳥もまた、智花に笑顔で返したのだった――――

―ガールズ・トーク　@慧心学園６年Ｃ組―

『それじゃトモ、飛鳥とは無事仲直りできたのね？』紗季

『うん、みんな心配かけてごめんね。』智花

『そんなことないよ。私も二人が仲直りできて凄くうれしいよ。』愛莉

『おー。ひなも、今度はちゃんとあすかとお話したい。』ひなた

『うんうんっ！やっぱあたしの思ったとーり、飛鳥を信じた甲斐があったな！』真帆

『何言ってんの。前の学校でもっかんのこと苛めてた奴らの仲間だったのかー！とか言ってたくせに。』紗季

『そんな昔のことはどーでもいーのっ！それよりもっかん、できたっ？すばるんにわたすやつ！』真帆

『う、うん。書いてはみたけど……で、でもやっぱり恥ずかしいかも。』智花

『ふふ、恥ずかしくても頑張らないと。こういうのは、ちゃんとした方が絶対印象深くなると思うから。』紗季

『おー。ひなも、いつもみんなにあげてる。おたんじょうかいの招待状。いっぱいお絵かきすると、かわいくなる。』ひなた

『えへへ。ひなちゃんからもらったお手紙、ぜんぶ大切にとってあるよ。』愛莉

『もっちろんあたしも！』真帆

『私も当然宝物入れにしまってあるわ。ひな、絵が上手いから羨ましいのよね～。
私も、もう少し凝ったのを作りたいとはいつも思ってるんだけど。パソコンのソフトとかあれば出来るのかしら。』紗季

『わーい。ほめられた。大事にしてくれて、ありがとうございます。』ひなた

『実はひなたの招待状を、参考にさせてもらいながら作ってたの。
素敵なお手紙をもらって、私もとっても嬉しかったから……。』智花

『おー。ひな、ともかのししょーになれた？わーい。』ひなた

『うんっ！先生のおかげで、何とか完成しましたっ。このお礼は、パーティーの日にさせてください！
みんなの分の招待状も書いてみたよ。鳥ノ宮小のみんなの分も書いてたから時間がかかっちゃったけど。
明日受け取ってもらえると嬉しいな。』智花

『わたしたちの分も招待状を作ってくれたの？……えへへ、嬉しい。
すごく楽しみにしてるね、智花ちゃんのお誕生日パーティー。』愛莉

『あたしも楽しみにしてるかんな！もっかん！さーて、あたしもあ

の準備にとりかからねーとな。』真帆

『……？真帆、また何か企んでるわけ……？心配だわ……。』紗季

第三話　咎を背負う少女（後書き）

虹人「とりあえずこれにてシリアス路線は終了！ってとこかな。」
雷華「……今思ったんだけど」
虹人「ん？」
雷華「未だにバスケやってないよね？」
虹人「！！！」
雷華「気づいてなかったんだ……」
虹人「まあそろそろバスケの練習風景の話が出るころだし、
それで勘弁してくれないかな？
次は智花の誕生日編だから本格的な対戦はもうちょっと後になる、かな」
雷華「つまりバスケパートは殆ど無し、と。」
虹人「う……。でもまあ後半からはバスケ分大目だから、
しばらくは日常パートを楽しんでもらえるといいかな。
それじゃあまた次回！」

感想がありましたらご自由にどうぞ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0304z/

ロウきゅーぶ!　Team of another　1st Capter　鳥ノ宮小女バス編

2011年12月29日07時49分発行